

# 癌とナッパ・青汁食

医学博士 遠藤仁郎述

## 癌とナッパ・青汁食

難病中の難病といわれる癌。できることが、かかりたくない。

これだけすすんだ医学でも、発癌物にとりかこまれている現在。いまだに、適確な予防法はなく、かかっただら、なるべく早く見つけ出して、根こそぎ切りとつてしまうこと。とされているが、これとて、うまく成功するのは、ごく初期の、小さくて数の少ない間だけ。大きくなつていたり、多くなつていれば、強力な放射線や抗癌剤の力をかるなど、いろいろ手をつくしても、仲々むつかしいことは、よく知られているとおり。

それが、なんど、ほかの難病のはあいと同様、ナッパ・青汁食（イモ・マメ・ナッパ・青汁食）を熱心にやつしていると、どうやら、めつたにからないようだし、存外、悪性度がかるく、進行がおそい。手術しても、出血や痛みが少なく、術後の疲労や発熱もないか、少なく、再発も少ない。

放射線や抗癌剤の治療にみられる厄介な副作用も少ないか、ほとんどない。

また、すでに転移があり、とてもながくはなかろうと思われたのが、五年、一〇年はおろか、二〇年もそれ以上も、何事もなく元気に生きている例。

青汁を飲んでいる間はよかつたが、やめると急速に悪化したり、再発する例。

あるいは、手術不能とされ、放射線や抗癌剤でしか治療できない全身性多発性の癌。たとえば、悪性リン

パ腫や白血病などにも著効がある。

しかも、ナッパー・ニー・五キロ（青汁五六六合）以上と、徹底的にやると、多ければ多いほど効果が大きい、といつた事実がある。

これは、おそらく、ナッパ・青汁食によって、現在一般の、不自然・不合理きわまる不完全食が改善され、この食のあやまりのために、にこり切っていた血がきれいになり、おどろえ、よわつていたからだ中のはたらきがよくなり、健康力・生命力がもりあがつて、細胞の癌化に抵抗する力（抗癌能）や、変性細胞を捕捉・殲滅し、そのバッコを防ぐ全身の力（免癌能）が強められるからであろう。

また、も一つには、この食改善の中心になっている良質ナッパに多いビタミンやミネラル、繊維などによる毒消し効果もあずかっているだろう。

すなわち、ビタミンA・B・C・Eには制癌能（癌化抑制）があること。

カルシウムや痕跡ミネラルには癌原物の生成を妨げる作用のあること。

繊維には、癌原物を吸着し、とり除く能力があること、などが知られているが、徹底したナッパ・青汁食には、さうに広く、すべての有害物にたいし、神秘的ともいべき、強力な解毒能“自然の力”があると想像され（拙著ナッパ・青汁食概説参照）、この“自然の力”によって、発癌物自体、あるいは発癌性代謝産物が、分解され、解毒されるのではないか。

つまり、ナッパ・青汁食では、

ただ、淨血による抗癌力の強化だけでなく、癌毒性の解毒も加わって、制癌能、抗癌能がたかれられ、強

められるとかんがえられないだろうか。

もちろん、これは科学性に乏しい單なる臆説、仮説。例によつての“なんでもナッパ・青汁居士”的ことと、わかつてしまわれればそれまでだが、少なくとも、上述の治療効果はこれを実証するに十分な事実で、その意義は無視されるべきではあるまい。

癌の予防・治療の一法として、あえて推奨する所以だ。

それに、たとえ、無効だとしても、多くの治療法にみられる、このましからぬ副作用は絶対ないから、ともかく熱心に、徹底的にやってみるべきだろう。

勿論、そのために大切なことは、安全良質ナッパ・青汁の十分な量を、根気よくとりつけ、たとえ小康が得られても、減量したり、中止しないこと。

それは、青汁によつて折角もり上つてきた抵抗能（抗癌力）が、減量あるいは中止によつておろえてくると、それに乘じて癌の活動がぶりかえし、病状がふたたび悪化してくる。

しかし、それにたいし、一旦落ちこんだ抵抗力はにわかには挽回しがたいため、癌は急速に進行するおそれがないではないからだ。